
SERIAL KILLER

真木 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S E R I A L K I L L E R

【Nコード】

N 1 4 4 1 K

【作者名】

真木 葵

【あらすじ】

連続殺人犯を追う佐藤刑事とコナンのショートストーリー

東都環状線を横目に一台の赤い乗用車が通常では考えられないスピードで走り去っていく。周囲の車は当然その車が着脱式赤色回転灯から威嚇を帯びた赤い光と鳴り響くサイレンを発していたから大人しく道を譲っている様子だった。

デジタル表記されている時計が一気に三つ数字が変わる。ハンドルを巧みに操る逞しい女性は、二十三時になった事で一層の苛立ちが見え隠れした。

「ごめんねコナン君、もう眠いでしょ」

「ううん、ゼーんぜん大丈夫。気にしないで、佐藤刑事」

しっかりとシートベルトに捕まり、佐藤刑事同様にフロントガラスの向こうから視線を放さずに少年は返答した。少しも眠たげな様子を見せない少年だったが、それでも小学一年生の子供である事は変わらないのだ。出来る事ならもういい加減家に帰してあげなければいけないのだが、それよりも何よりも今はただひたすら車を走らせるしかなかった。前方を行く黒の4WDを追って…。

「…はい、もしもし」

コナンは佐藤刑事から預かっていた彼女の携帯電話の着信を断りも無く出た。ディスプレイに表記されたのが、彼女の部下である高木刑事の名だったからだ。

「うん、うん…」

いつもなら彼女もハンスフリーで会話しているのだが、被疑者を追う為に咄嗟に車に乗り込んだ時につい助手席の少年に預けてしまったのだ。いつも部下にやるように…癖で。

「解った、伝えるね。佐藤刑事、鑑識の結果が出たって」

「やっぱり白瀬が犯人で間違いないのかしら」

「うん間違いない。県警も動き出したからこのまま追えって目暮警部からの命令だって」

「オッケー、了解」

確実なる証拠さえ掴んでしまえば後は確保のみ。佐藤刑事はアクセルを一層強く踏み込んだ。コナンも高木刑事からの通話を終えろと再び携帯を手に持ったまま彼女と同じく前を走る逃走車両を食い入るように見遣った。長年凶悪犯罪者を追っている彼女のドライビングテクニックは助手席に居ると少々恐ろしい物であったが、絶対に犯人を逃がさないとスピードに食らいつく彼女のプライドは心地よいまでに無茶ぶりを発揮していた。

「ところでコナン君、一つ聞いても良いかしら」

「なあに？」

「コナン君は最初から犯人が白瀬だと疑ってた様だけど、一体どうして？」

トンネル内部に規則正しく設置されたナトリウムランプにより車内がオレンジ色に染まった。外国映画のカーチェイスシーンを思わせるスピードのまま。

「靴だよ」

「…靴？」

「そう、あの人あのマンションに女の人と四年は一緒に住んでるって言ってたけど、玄関には真新しい23センチのハイヒールが一足置いてあっただけで、靴箱の中は小五郎のおじさんが履く様なデザインで、しかも27センチっていう大きな靴があるだけだったんだ」

最初に容疑がかけられる前に犯人の自宅に事情を聴きに行った際の事をコナンは言っていた。佐藤刑事と共に行ったその先で、持ち前の子供の振りして玄関から中の様子を窺っていたのだ。警察を名乗る彼女が疑う振りをして押入つてしまえばその場で逃走されかねない上に、証拠と令状が無い以上は必要以上の捜査が出来ないのだ。

「女の人っておしゃれをする時に履く靴とか、ちょっと運動とかする為の靴とか、普通だったなら最低でも2〜3足は持つてるモノ何じゃない？高校生の蘭ねーちゃんだってそうなんだから」

「なるほど。それでコナン君は白瀬が“嘘の供述”をしてるって最初に気がついて疑っていたのね」

「そういう事」

マスコミにも取り上げられる眠りの小五郎と称された名探偵の側にいつも居るせい、この少年は良く大人が気付かない変な事に意識が向く。大人が抱く先入観を持たない子供故のまぐれだと最初は考えていたのだが、段々その考えも変わっていった。

「それにおかしいと思ったんだ、親しい人が変死体で見つかったって言うてるのに“何処で”とか“なんで”とか何も聞いて来なかったじゃない？僕だったら最初に聞くとと思うんだけどね、感情的になつて」

事件という物を様々な点から観察する目を持っていると佐藤刑事は確信していた。物的証拠も見逃さずに警察をさりげなく真相へと誘導している。犯人を見つける事だけに躍起になっている自分よりも、一歩後ろから視野を広げて広範囲を注視しているのだ。

『さすがだわ』

この少年の洞察力は本物だと認めざる得ない。出逢った頃から一目置いては居たが、ここまでくるとさすがに少年が何者なのかが気になってくる。ただ名探偵と呼ばれている毛利小五郎の側に居るからだけというワケではなさそうだと、徐々に気付き始める。

彼は“正体を隠している子供”なのではないかという、まるで非現実的な考えを…。

鋭利な月が中天に差し掛かっていた。パーキングエリアで車のドアを開けると流石にまだ冬の冷たさを帯びた二月下旬の空気が頬を突き刺して来る。容疑者の確保も終えて一段落つく。二人は別々に手洗いを済ませて携帯で連絡を取る。佐藤刑事は部下の高木刑事へ、コナンは帰りを待っている探偵事務所の幼馴染へこれから帰ると…。

先に助手席へと戻ってシートベルトを閉めていると、佐藤刑事が手に紙コップを二つ持って戻ってきた。コナンは右手を伸ばして運転席のドアを半開きにしてやる。

「コーヒーで良かったかしら？」

「うん、ありがとう」

手渡された珈琲はトラベラーズリッドの飲み口から、独特の香りを放っていた。ハンドルの右側についているドリンクホルダーに立てると、ドアを閉めてシートベルトを引っ張った。

「少し休憩しなよ佐藤刑事、僕どうせ明日学校休みだし」

「でも蘭ちゃん心配してるわよ？」

「今電話したから大丈夫だよ。せめてコーヒー位はゆっくり飲んで」
「そう…?」

慣れているとは言え被疑者を追って2時間半も車を走らせていたのだ、疲れていない筈はない。コナンの気遣いは佐藤刑事にとってありがたい申し出だった。

じゃあそうさせて貰おうかな、と言いシートベルトから手を離れた。コーヒーを取って、ほんの少しだけシートを斜めに傾ける。既に時間は日付を跨ごうかという数字を表記していた。

「それにしてもコナン君って本当凄いわね。一体どうしてそんなに色々気付くのかしら」

「ただのまぐれだよ。小五郎のおじさんと一緒に色々な現場を見て回っ…」

本やTVで色々な情報を知りえる事が出来る、今の現代社会ではネットと言う物が最大の情報源でもあり、現場と言うのは小五郎と行動を共にしていれば窺える事が出来る。だから変な事に気がつくだけだよとコナンはいつも通り、自分の中でマニュアルになっている台詞を口にした。

けれどコナンを見つめる佐藤刑事は、決してただの頭が切れる小学一年生を見る目ではなかった。確かに少年が居なければこんなにスムーズに被疑者を確保する事が出来なかったけれど、普通に考えれば何処の警察が小学生を連れて連続殺人犯を追いかけると言うのだろうか。

コナンは思わず視線を外して手渡された温かいコーヒーを再び口にする、喉を通る程良い苦み。身体の芯から温まる飲み慣れたカフェインだったが…ミルクも糖分も入っていない。

佐藤刑事は誤魔化せないな、と胸中で苦笑する。だが決して強く尋問はしてこない彼女の態度も、何処か幼馴染が見せるそれと重なって見えて仕方がなかった。

「以前、高木刑事にも聞かれたよ」

「え…？高木君に？」

「そ、ほら、東都タワーのエレベーターに爆弾をしかけられて僕と高木刑事が閉じ込められた時」

コナンの冷静な判断がなければ水銀レバーが発動して爆発していたかもしれない。高木刑事が一人で乗っていたら…エレベーターの天井の蓋をあけて乗り込んでいたら…二度目の振動で発動していたのかも知れないのだ。けれどコナンが同乗していた事により、あの時爆弾を解体する事が出来た。そして何より、犯人の思惑通り進んでいると見せかけて、最後の爆弾の在り処を示す暗号を解いて無事に逮捕に至ったのだ。

「あの時も聞かれたんだ。『君は何者なんだい』ってね」

佐藤刑事がハッキリと言葉にできなかった質問を、コナンは当てて見せた。子供だと言う理由で本来なら大人は当てにせず話すらきかない状況だと言うのに、段々佐藤刑事や高木刑事、そして二人の上司である目暮警部もコナンの言葉に耳を傾ける様になっていった。

彼の言葉は事件の謎を解くキーワードになっていると言う事が、何度も起こったから。

「でもね、佐藤刑事」

ふいにコナンの携帯電話が短く振動した。着信を知らせるメール

だ。受信したメールを開くと、そこには大切な幼馴染の名が送信者の欄にあった。それだけでコナンはささやかながら嬉しい気持ちで胸を掴む。心配してくれている言葉と、送ってくれた佐藤刑事にお礼を言うから家に着く頃にまたメールをくれと言う彼女の優しさ。

「今は、まだ、言えないんだ」

工藤新一だという真実を話すワケには行かない。話してしまえばコナンの事をただの小学生じゃないと気付いている佐藤刑事は楽になるだろうし、捜査協力もしやすくなる。けれどその分、その真実を知ってしまった人に、組織の手が及ぶかもしれないと言う危険が待っている。

「だからもう少しだけ待ってて欲しいんだ。いつか必ず話すから」

江戸川コナンという小学一年生は、大人びた笑みでそう告げる。

仕草の一つ一つが、発言の全てが、子供を装っている“何者か”にしか見えなかったけれど、佐藤刑事は彼が纏う不思議な感じが、何処かで逢った事がある人物と重なっていた。

誰だかは解らない、けれどそれとなく察した“名探偵”の面影に。

「解った。…いつか、必ずね」

「うん」

「ありがとう」

残り少なくなったコーヒーをホルダーに戻すと、座席の角度を直した。シートベルトを引っ張り、カチンとはめると車のキーを回す。

「じゃ、帰ろうか」

サイドブレーキを下して車が動き出す。行きよりも穏やかなスピードで、空いてきた高速に合流する。コナンは蘭へと返事を打って送信すると、ゆっくりシートへ体重を預けた。佐藤刑事が小さなボリウムで付けたラジオからは、聞き慣れない外国のシンガーが歌うスローテンポの音楽が流れて来る。

フロントガラスから時折見える小さな星を数えて居た。コナンは徐々に瞼が閉じて行く。佐藤刑事が可愛い寝息を立てて眠るコナンを起こすまで、小さな名探偵は浅い眠りに揺蕩っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1441k/>

SERIAL KILLER

2010年10月11日05時25分発行